

## 「特別史跡五稜郭を知る」

### 3、幕末の激動と、その後の五稜郭

#### ①、戊辰戦争最後の戦い

ペリー提督の黒船来航から始まる、日本の開国か攘夷かに端を発する問題は、徳川幕府が弱体化していることを露呈することとなりました。それまで幕府による圧力に耐えていた西南諸藩は、ここぞとばかりに反幕勢力として結集し、慶応3年(1867)に、徳川慶喜が大政奉還により事態の收拾と平和的解決を図りましたが、京都の倒幕派公卿達の暗躍もあり、遂に明治元年(1868)1月3日、京都の鳥羽伏見で、薩摩藩・長州藩などの倒幕軍と、幕府軍の間に戦端が開かれました。戊辰戦争の始まりです。

幕府軍は軍備・軍制の近代化が立ち遅れていたことや、薩摩・長州側に「錦の御旗」が掲げられて、一転「賊軍」となったことによる戦意の低下などにより劣勢を挽回することができず、上野・寛永寺に立て籠もった「彰義隊」の壊滅や、幕府陸軍の主戦派による江戸を脱走しての抵抗も次々破られていきます。こうして主戦場は西南諸藩に対抗して東北・北陸地方の諸藩が5月3日に結成した「奥羽越列藩同盟」に対する包囲戦へと移り、同盟の盟主である会津藩が凄絶な籠城戦の末に



「幕府軍将校 集合写真」



「榎本武揚」

降伏し、本州での戦いは一応終息します。

明治元年(1868)8月、温存されていた旧幕府脱走軍の艦隊は東北諸藩を支援するため江戸湾を脱走、9月26日、仙台湾へ入港しますが、「列藩同盟」は既に壊滅状態、会津藩も風前の灯となっており、ここで、北関東から転戦してきた主戦派陸軍部隊を艦隊に收容し、蝦夷地を目指しました。

同年10月20日、森村(森町)の「鷲ノ木」へ上陸した旧幕府脱走軍は、大野・七飯・川汲などで迎え撃つ箱館府兵を打ち破り、10月26日には無人となっていた五稜郭を占拠します。続いて新政府側の松前藩を攻撃し、松前藩主が青森へ脱出したことにより、12月15日には全蝦夷地の平定・領有を宣言、旧幕府海軍副総裁であった**榎本武揚**(えのもとたけあき)を総裁とする暫定的な行政府を編制し、箱館の民生の安定を図りました。

しかし、翌明治2年(1869)、蝦夷地に春の到来とともに明治新政府軍の反撃が開始されました。旧幕府脱走軍は、前年の松前藩攻撃の際に、当時最強といわれていた軍艦「開陽」を暴風で失っており、海軍力の逆転した脱走軍は、新政府軍の「乙部」への上陸を阻止することはできませんでした。



「土方歳三」

圧倒的な兵力を次々投入され、元新選組副長で旧幕府脱走軍の陸軍奉行並として陸上戦を指揮した**土方歳三**(ひじかたとしぞう)の善戦も空しく、5月11日には新政府軍の箱館総攻撃が開始され、土方も戦死。箱館湾の奥深く侵入した新政府軍軍艦「甲鉄」からの五稜郭に対する艦砲射撃にも晒され、5月15日には弁天岬台場が降伏、16日には千代ヶ岡(千代ヶ岱)の陣屋が白兵戦の末に玉砕するなど、旧幕府脱走軍の拠点が次々失われ、5月18日、榎本武揚らは降伏、五稜郭は新政府軍に明け渡され、箱館戦争は終結しました。

「諸国武者八景 函館港」

## ②. 箱館戦争の持つ歴史的意義

こうして、徳川幕府による蝦夷地経営の拠点として生み出された五稜郭は、皮肉なことに、日本人同士の戦いの拠点として使われてしまいました。

それでは、多くの人々の血を流してまで、彼ら旧幕府脱走軍が蝦夷地で目指したものは何だったのでしょうか？

脱走軍のリーダーである榎本武揚は、艦隊の江戸湾脱走の際、仙台湾出航の際、そして蝦夷地平定後など、再三にわたり、明治新政府に対して『徳川家臣大挙告文』、『嘆願書』などと



て訴えています。彼らの要求は、大政奉還により生活の糧を失った徳川家臣団を蝦夷地に移住させ、開拓に従事しながら日本の北の守りを固めることで明治天皇を中心とした新しい日本の発展に貢献したいというものでした。決して、いわゆる「蝦夷共和国」と呼ばれるような、明治政府に対抗する独立国家を目指したものではありません

幕府軍軍艦「回天」残骸

く、根底には旧徳川幕府の海軍副総裁としての立場から、職を失う幕臣や、幕府の崩壊に際しても忠義を尽くしてくれた佐幕藩の藩士に対する責任、彼らの救済策として敢行されたものと言えると思います。

多くの戦死者が出され、また、箱館市民にも数多くの被害があった箱館戦争に何らかの意義を見出そうとするならば、ひとつには、蝦夷地に対する知識を持っていた榎本武揚の、この行動を通して、明治新政府が北海道に対して着目することとなり、正に榎本が構想していたのと同じ、「屯田兵」の制度を採用することになりました。これにより、現在の北海道の基礎が形作られていくこととなります。

また、旧幕府脱走軍の幹部達の多くが、箱館戦争後、釈放されて北海道開拓使に出仕することになりますが、彼らは、明治新政府軍に抵抗した軍人であると同時に、旧徳川幕府が育て上げた当時最高の技術官僚だったのです。箱館戦争は、彼等の存在を計らずも際立たせることとなり、明治新政府の各方面で欠かせない才能として活躍の場を与えることとなり、結果的に明治の日本の発展に大きく貢献することとなったと言えるでしょう。

### ③. 箱館戦争後の五稜郭

箱館戦争の終結後、五稜郭は、明治政府の開拓使により管理されることとなり、箱館奉行所の庁舎や附属の建物のほとんどが取り壊されてしまいました。明治6年(1873)から明治30年(1897)までは陸軍省の所管となり、軍隊が駐屯して練兵場として使われました。

その後大正時代に入って2年(1913)には、当時の函館区へ無償貸与され、翌大正3年(1914)からは公園として市民に開放されました。現在の桜の名所となるのは、この年から大正12年までにわたって、約5000株の桜の植樹がされたことに始まります。



絵葉書「(函館郊外)五稜郭公園の桜」

また、大正11年(1922)に国指定の史跡となり、昭和4年(1929)の郭外長斜堤(長斜坂)部分の追加指定を経て、昭和27年(1952)には北海道で唯一の特別史跡に指定されて現在に至っています。

### ④. 市民と五稜郭

徳川幕府による蝦夷地経営の拠点として誕生した五稜郭は、明治新政府に引き継がれ箱館裁判所(箱館府)となり、その直後、旧幕府脱走軍に占拠されて暫定的な軍事政権の政庁となりましたが、その後も北海道開拓使や陸軍省などの所管として、一般市民とは縁遠い地域であったようです。しかし、そんな中でも、市民は積極的に活用しようとしていました。

箱館戦争終結後、天然氷の採氷事業に着目した横浜の商人中川嘉兵衛(なかがわかへい)が、明治3年(1870)の



五稜郭 伐氷風景

冬に五稜郭の堀で採氷に着手、翌年には東京・横浜などへ向けて670トンを送り出しました。この氷は、人造氷が普及し、同時に、郊外に住宅地が増加し堀の水質が悪化してきた昭和10年頃まで、「五稜郭氷」などとして親しまれました。



「五稜郭の堀での水泳記録会」

これらの反省に立って、また、特別史跡に指定されている文化財として、さらには、歴史を題材とする人文観光における重要な観光資源として、五稜郭の環境整備が進められ現在は函館市により、平成22年の完成を目指して「箱館奉行所」庁舎の復元工事が進められています。

また、郭の内外に植えられた約1600株のソメイヨシノの開花による道南有数の桜の名所として親しまれている他、「箱館五稜郭祭」や「市民創作函館野外劇」の舞台、「はこだて冬フェスティバル」の会場や「五稜星の夢」イルミネーションの点灯など、特別史跡としてのロケーションを活かした、市民主体によるイベントの開催に、四季を通じて利用されています。

北海道で唯一の特別史跡という重要な文化財であると同時に、市民にとっての緑溢れる都市公園として親しまれているその姿は「保存と活用」という、文化財が持つ、相反する側面を上手に両立している注目すべきケースと言えるでしょう。

また、子供達にとっては夏季には水泳プールとして、冬季にはスケート場として親しまれていたようです。しかし「函館氷」が昭和12年(1937)に採氷されなくなったと同時期の昭和14年(1939)に水質悪化でプールが使用禁止になるなど、市民生活の拡大が五稜郭周辺の環境悪化を招いたこともまた事実です。